

「鯛の頭も信心から」

「いかでかは思ひありとも知らすべき室の八島の煙ならでは」(詞花和歌集)。恋多き青年貴公子藤原実方の歌です。常に白くくすぶり続けているという「室の八島」の煙と違って、目には見えない私の恋心をどうやってあなたに伝えればよいのでしょうか。

この歌に出てくる「室の八島」とは、下野国(現栃木県)にあったとされる伝説の歌枕。常に煙がたなびいて、それが竈から立ち上る煙のように見えたところから、都の歌人に「煙」になむ歌枕として詠みこまれるようになったという。煙とされたのは今では水蒸気と解されています。多くの歌枕がそうであったように、都人の多くは炬燵の中で詠うので、どれほどの歌人がこの煙を目の当りにして詠んだかは実に疑わしい。とかくするうちに「室の八島」から煙、つまり水蒸気が立たなくなってしまう。歌枕の場所は文字通り雲散霧消してしまいました。鎌倉時代のことと言われていますが、いなそもそのもの初めからそういうものが無

かったのだという説もあるらしい。この歌枕を詠み込んだ数多くの「名歌」に実景を詠んだらしいものが一首も無いのがその証拠だというのです。

存否はともあれ、こうなると下野国にとっては一大観光資源の喪失です。その対策と考えたかどうか、現栃木市惣社町にある大神神社の境内に池をめぐらせて中に八つの島を造って室の「八島」と「再定義」してしまいました。実は、「ムロノヤシマ」とは、平安朝の宮中にあった竈の隠語であったという説もあり、「ヤシマ」が八つの島とは何の縁も無いとする説もあって、大神神社の池に浮かぶ八つの島はその正当性に詮議が必要となりました。

ところが、みちのくの歌枕を訪ねる途次、芭蕉と曾良の一行が最初に訪れた地こそここ「室の八島」でした。そこで二人の会話が『奥の細道』にていねいに書かれたことで、今ではゆるぎない歌枕「室の八島」となって世間に定着しています。

今に残る数多くの名所旧跡の故事来歴にはこんなおらかな話も多いのです。